

シベリア抑留

北海道 東海林 正 雄

一 ソ連軍侵攻前

昭和十八（一九四三）年三月八日、国鉄勤務中、臨時召集令状を受ける。札幌月寒第九五五部隊防空連隊へ入隊。照空連隊へ入隊。探照灯の整備訓練を受ける。

昭和十八年六月二十七日、小樽港より北千島占守島へ向かう。

昭和十八年七月一日、十三時北千島幌筵海峡へ入る。柏原港へ上陸。第二中隊は占守島に上陸。早速幕舎を張り、占守島での生活に入る。占守島の警備、対空戦闘に参加する。

昭和十九年五月第九十一師団防空隊へ転属。

二 ソ連軍侵攻

昭和二十年八月十六日、ソ連軍が日本に対して宣戦布告の情報入る。カムチャツカ、ロバツカ岬

より占守島に向かって艦砲射撃を開始する。

昭和二十年八月十七日、朝二時三十分、ソ連軍が国端岬へ向かって上陸開始の情報入る。占守島へ幌筵島の兵力が集合して、集中攻撃開始する。兵器、弾薬を整備する。また糧秣の準備に忙しく、良い軍服を着て待機する。ソ連軍はかなり死亡した情報入る。

昭和二十年八月十八日早朝、ソ連艦船七隻が幌筵海峡に入る。艦砲射撃を開始する。占守島へ向かって、占守島の片岡飛行場から日本の戦闘機四〜五機が飛び立つ。二機がソ連軍の艦船に体当たりして撃沈せしめた情報入る。また国端岬へ上陸したソ連軍を高射砲で撃退する。ソ連軍かなり死亡した情報入る。

三 終戦

昭和二十年八月二十三日早朝、停戦命令が出て終戦となる。我々には、無条件降伏したことが分からずに戦闘を続けたのです。

昭和二十年八月二十四日、占守島の三好野飛行

場で武装解除をソ連軍の司令官により行われる。日本軍は白旗を掲げて武装解除される。以後ソ連軍の指揮下に入る。占守島はもともと無人島でした。長崎港で旧日魯漁業の宿舎を改造して私達は生活に入ったのです。

春から秋まで日魯漁業の女工さんが函館より来て、秋に帰る。季節的に魚の加工していた所と言われたのです。秋には引き揚げて帰ったところと聞きました。

昭和十八年になって女工さんも戦闘が盛んになったので来なくなつたようです。以後は兵隊だけの島でした。

四 シベリア抑留地への旅

昭和二十年八月二十四日、ソ連の官憲が見えて日本兵の個別点呼を受け武装解除されて毎日旧日本兵の兵舎の修理、また薪取りする。島にはハエ松が島一面に生えている。高さ二〜三メートルの松の木で、横に曲がりくねって伸びる松です。この松の木にロープで縛つて四〜五人で引っ張つて

引き抜いて小さく切つて燃料にするのです。毎日このような作業が続きました。

黒パン三〇〇グラム、スープ飯盒のふたに八分目でこれで一食です。

無人島で家畜はいない島です。

昭和二十年九月二十八日、十五時に占守島の片岡港よりソ連石炭船に乗船する。石炭を降ろした後、この船に乗り込む。三千トンぐらいの船で、船底に乗せられる。千人一箇大隊乗船したのです。防寒服と被服、毛布、衣類などと糧秣も持てるだけ持つて乗船したのです。大隊長は二中隊長の山藤大尉です。私達の中隊長です。東京ダモイと言われて喜んで乗船したのですか、厠は甲板にあるので、長い梯子を上下せねばなりません。一つの梯子で千人の兵隊が上下するので大変でありました。

昭和二十年九月二十八日夜中に出帆しました。私は磁石を持って乗りましたので、ズーと磁石を見ていました。船は南西へ向かつて進んでること、

三日ほどでしたが、これは北海道の根室か釧路へ着船するものと思っていました。皆喜んで楽しみにしていたのです。

半信半疑で船の底に乗せられて、食事は甲板で受領してロープを下へ降ろして下で取ってもらおうようにして毎日の飯あげをしたのです。この繰り返しでした。船は四日目の晩になって北西へと進んでいるのに気づきました。夜は船の中が寒くなるのです。五日目と六日目は非常に寒くなり、北上しているのに気づきました。皆船に酔って相当苦労したようでした。今になって考えて見ると宗谷海峡から北上して間宮海峡を北上していたのです。六日目になって船の甲板から左の陸地を見ましたら、真つ青な松林が見えて建物も赤い屋根がたくさんあるので、小さな町かなあとと思い、朝小隊長から、ここは沿海州のポートワニ港であると言われたのです。ソ連の刑務所の囚人がたくさん働いている所と聞いてびっくりしました。大変ひどい所へ来たのでびっくりしました。岸壁まで鉄

道線路が敷かれているのです。

昭和二十年十月七日朝、下船命令が出て点呼を受けて約五キロメートルを徒歩で山の中へ歩いたのです。

途中、ドイツの捕虜と出会いました。その格好を見て、着ている服は穴だらけの服を着て三個四個と缶詰缶をぶら下げて、やっと歩いている姿を見て、本当にびっくりしました。我々も一年ぐらいでこうなるのかと思ひ、本当に可哀想になりました。

五 抑留地の生活

この収容所は八三六収容所だそうです。最初の収容所です。毎日の作業は鉄道線路の布設する前の路盤を作る工事です。長さ千メートルぐらい、幅八十メートル、高さ五十メートルの所の岩石の山を掘り割ってダイナマイトで岩石を砕いて、砕いた岩石をトラックに積み込む作業です。

六 労 役

この岩石を積むのに毎日怪我人が続出しました。

また死亡する人も時々出ました。手や足に岩石を落として手や足を折る人が毎日でした。毎日、病院や医務室では治療に当たっていたようです。この工事は前はソ連の囚人がやっていたようです。

労働時間は朝六時より夜六時までと、夜六時から翌朝六時までの二交替でやりました。夜間作業になったら夜の十二時から朝二時ごろは眠くてどうにもならないぐらい眠いので、空を眺めて北斗七星の星を見ていたものです。大体の時間が分かれます。ソ連兵の看守が自動小銃を背負って高い所から看守しているのです。夜間作業は大きな野外灯をつけて、作業しているのを見守っているのです。私達の収容所には逃亡する人は聞いた事はありません。でも最高哀れに見えて度々余計なことを考えて涙がでることがありました。逃亡して銃殺されることは他の収容所ではあったことを聞いています。

食事は大豆の粉とコーリヤン、エンバクの粉と冷凍魚、キャベツ、玉蜀黍の粉を塩と油を少し入

れてスープのようにしたものが食事です。黒パンは重労働で四〇〇グラム、軽労働で三五〇グラム、普通の人は三〇〇グラム、ONとOKは二五〇グラム、病人は二〇〇グラムです。

気温は零下三〇度から四〇度ぐらいです。どんな寒くても休まなかったです。気温が下がると凍傷になる人が多く出ました。ソ連では凍傷を嫌うのです。凍傷になつて切斷する人が案外いました。私も昭和二十二年一月二十八日、急性肺炎にかかり軍医(ソ連)が入院といわれたのです。病院へ行つて体温を計つたら体温は少なくて入院しなくてすぐ帰されました。すぐ医務室に入りました。ソ連は入院する時は必ず体温に関係なく入浴して体を綺麗にして入院させるので、この入浴で死亡する人が随分いると聞いています。これで私も生き延びたと思いました。

それから医務室勤務となり患者のお世話をしたり、自分も注射して療養の身となり、少しは楽になりました。毎日肺炎とジフテリアの患者と、足

と手を折る人が毎日でした。

私はシラミがついたのはちよつとだけでした。

毎日夕方、作業から帰ったら着ている服を脱いでデズカメラ（殺菌室）へ入れて翌朝これを出して着るので案外シラミは死んでいたようです。

医務室には吉野軍曹、平田軍曹、牧野上等兵いずれも衛生下士官と衛生兵がいるのでこの方々に少し教えられて助手にいたのです。

昭和二十一年四月ソ連軍医による体格等位検査があり、四月二十一日十六時にONとなり、また栄養失調で他の収容所へ移動となったのです。二百人が八一七収容所へ移動したのです。軽作業の収容所です。

ここで東京の増田さんと一緒にいて大変お世話になりました。作業から帰ったら食事を温めて頂いたりして大変お世話になりました。また三八五収容所へ移動になりました。この収容所から二十日でまた移動です。検査があり、二級の体位となり、また八一七収容所へ戻ったのです。ここは営

内作業で大工や左官、鍛冶工、板金工などの仕事です。

七 抑留者の統制管理

昭和二十一年十二月三十一日大晦日の日である。何も変わったものはない。正月気分なんか全然ない。今夜もコーリヤンの粉のスープと黒パンだけである。塩鯺一匹ずつである。

昭和二十二年一月である、必ず体格検査があり、体格等位により労働区分で仕事するのです。この様な基準はあるが余り該当する者はいなかった。ON、OKは少し休養させた程度である。朝夕は必ず点呼である。朝六時と夜六時は点呼が始まるので室に残ることはできない。五列に並んで寒い時などは三十分も四十分も外に立っているのである。

兵舎の点検もする。ソ連兵が見回るので、ソ連兵が人員を数えるのに三十分も四十分もかかるので本当に困ったのです。日本兵は番号をして最後の番号で大体分かるのである。ソ連兵は五列にな

らないと数を数えることができない。最後に日本の将校が数えてソ連将校に報告したようです。

シベリアに行つて一冬越したら、着ている日本の軍服は全部破れて着れなくなる。昭和二十一年に千島から持つて行った針と鋏は全部ソ連兵にとられてしまつて誰も持つていない。修理することができないので、破れたら終りである。穴だらけの服をそのまま着るのです。

食物は黒パン三〇〇〜三五〇グラムのみでした。スープは飯盒のふたに八分目、コーリヤン、玉蜀黍、エンバク、大豆。これはスープの原料で魚は一週間に二〜三回、塩鯿などは一匹食事に与えられた。肉は全然なかった。

毎晩パンやスープだけでは寝てから腹がすいて寝られなくて、昼に外へ出た時に食べられる野草を缶詰の空缶にいっぱいとつてきて、これをスープに入れて、お湯を飯盒に入れて夕食に煮て食べたものです。また山へ出た時に枯れ木の中にいる虫を捕つてきて煮て食べたものです。不足分を補

うので助かりました。

一カ月に三回ぐらい休日がありました。休日には収容所で皆と話をしたり寝台で本を読んだり、またコックリさんという占いをやつたのです。四〜五人で集まつて部屋でやつたものです。ダモイはいつごろ帰れるかを占うわけです。いつとき喜び、そして寝るのです。大変器用な人がいて、将棋の駒や麻雀のパイ等を本物そっくりに造る人がいましてびっくりしました。

建物の修理や建築する場合にはほとんどの日本人の兵隊が造つたのです。ロシア人より日本人のほうが器用でした。

ソ連での建物は松の木を山で切つてきて丸太を柱立てして、この間に丸太を積み上げて、この積み上げた丸太の表面にドランケ（壁の下地）を割つてこれを丸太の表面に三角形の形を打ち付けるのです。この壁に粘土を打ちつけて表面をコテでなでて、仕上がりです。中に丸太が入っているので厚さ五十センチくらいになるのです。この壁を

零下四〇度で霜柱が枕元まで通してくるので寒くて眠れない日が時々ありました。大変苦勞しました。

また朝晩六時に山へ行つて一人一本ずつの枯木を倒して担いで来るのが日課でした。これを切つて燃料にしたのです。炊事と兵舎両方の燃料にしたのです。

コムモリスク市へ移動した時、朝晩民主主義の講習会がありました。

昭和二十二年七月に日本の兵隊は特別教育を受けたものです。先生は日本の兵隊で特別に教育を受けた人が先生になるのです。また赤旗の歌を毎晩歌つたものです。ソ連も日本の兵隊にこの教育を任せたとすうです。

ソ連も帰国が近づいたのでほとんど日本兵に委ねたようでした。ダモイばかり気にして頭からダモイが離れないのでした。私達は余り懲罰を受けた人はいなかったと思います。ほとんどが真面目な人が多かったと思います。私は栄養失調になつ

たのでダモイが近いと感じていました。

八 抑留中の生活と極限状態にある意識

人間このような環境に遭つた場合、何と言つても各個人として強い気持ちを持つて何事も実行することだと思ひます。常にこのような意識を持つことが必要と考えます。どんなことも最後までやり遂げることと思ひます。意志の弱い人はすぐダウンしてしまいます。私も大変良い経験を経験したと、これからの人生に生かしていきたいと思ひます。

私は生まれて初めてこのような体験を通じて、今、顧みると苛酷な労働に耐えてきたことを思うと人間は強い意志で、どんな困難にぶち当たつても最後までやり遂げる気持ちをもつことが一番必要であることを体得できました。また食事はいつも不足であることで、日ごろ考えている中でどんなものでも食べられる物は食べられるので命をおとすことはないということがわかりました。

九 帰 還

昭和二十二年八月下旬に帰国者名簿ができたという情報が流れる。

コムソモリスク市の中にある一一三収容所で帰国者名簿をソ連の官憲が読み上げました。「ト」の部で東海林と呼ばれたのです。大変嬉しくて小躍りして喜んだものです。何とも言えない嬉しい気持ちになりました。それから被服検査があり、直ぐ出発になり、この収容所へ来た者の内十人が残留となり、この中に東京の増田さんが入っているので、びっくりしました。可哀想だなあ……と思いましたが、増田さんすぐ帰られるようになるから心配しないで我慢して頑張つて下さるように告げて別れました。

私達は貨車の中を二段式にして、この貨車に乗り込んだのです。約五時間走りました。ポリシヨリードへ着きました。夕方です。

第一〇七収容所へ着きました。ここは中間集結地で幹部の人は皆ソ連の教育を受けた人ばかりで

す。毎日の作業と学習に非常に熱心な人ばかりでした。これから帰国者を決定されるということ、毎日営内作業で一生懸命に仕事をしました。日本へ帰れると思いい、毎日故郷の空を眺めていたのです。

昭和二十二年十月四日、ソ連将校より、今日貨車が入ると聞きました。半信半疑でまたデマかと思つたのです。夕方十八時に貨車が本当に入ったのです。すぐ乗車準備です。非常に忙しい。山を見たら真白く雪が見える。寒さも零下四〇度ぐらいある。収容所前に貨車が入り停止する。個人検査と点呼を受けて乗車する。

昭和二十二年十月四日十九時三十分、列車は出発する、夜通し走る。十月五日朝二時ごろにどこか分からない駅へ停車する。よく見たらコムソモリスク駅である。

ここに六時間停車して、この列車に千人ぐらい乗車している。花輪を飾ってスローガンを掲げて革命の歌を歌いながらナホトカへと列車は走る。

見渡す限りの原野で、二日ぐらい走るも、山は余り見えない。点々と白樺の木が見えるだけである。二日間走って大きな町へ入る。停車してみたらハバロフスク市である。かなり大きな町である。各司令部があると聞いた。

ハバロフスク市へ入る前に長い鉄橋を通過する。約二十分かかる。この河はアムール河の鉄橋と分かりました。ここに六時間停車しました。

十月七日十三時に列車は出発する。広大な広野を南西へと走る。すべて帰還の思いを胸に秘めながら寒さも忘れてガタガタと揺れながら走る。そのうちに列車は複線線路に入る。中間駅であり、この駅を停車せずに速い速度で列車は通過する。

ここにもたくさん日本兵が見える。その時、お互い手を振りながら通過する。随分日本兵がたくさんいることに気づく。一足先に帰還するが、元気で一日も早く帰国をと祈りつつ、列車は通過したのです。そのうちにウラジオストク港の手前で単線となり、ウラジオストクの反対方向へ列車は

走ること二十四時間ほどでやっとダモイ港のナホトカ駅へ到着する。十月十一日の昼ごろである。

ここへ着いてびっくりしたことは収容所の綺麗なことと驚きました。下車してすぐ見送りに来てくれたソ連将校が私達を整理させて色々と検査のあと別れを告げて収容所に入る。ここは第一と第二と第三に区分されている。

第一は引揚船に乗船までの予備教育の場

第二は民主的作業実践と教育の場である

第三はソ連民主主義体得の宣誓をする場所と聞いた。

このあと復員式を終了して日本の船に乗船という順序である。それから第一から第三で税関検査が行われる。第一から第三まで何か一つでも悪い行為があれば、民主的に徹しない者は残留となる。帰国中止と言われる。一日も早く帰りたいのが人情である。一生懸命に作業と教育を熱心にやるのである。これが全部終って乗船させると言われる。

昭和二十二年十月十五日朝九時ごろ復員式が開

催される。最後の日の朝に入船の情報が入る。所長及び復員官の訓示がある。長い間御苦勞さん、良く命に従い働いてくれたと、お礼の訓示があった。今帰還につく日本人よ、全く別れはつらいと言う感謝の言葉があった。帰国後、民主主義を大いに宣伝実践してほしいと言われる。これが終り、各個人の点呼に入る。

私は「ト」の部を聞いていたら東海林と名前を呼ばれる。私はこれでやっと帰れるのだと安心しました。約四キロの道程も徒歩で港へ向かう。やっと岸壁へ到着する。大きな日本の船である。船の左右舷に信洋丸と見える。間違いなく日本の船である。

この船を見て思わず涙が出て止まらない。今ここで過去の二年間抑留された強制労働生活を思い、あの寒さの中での労働とたくさんの亡くなった同胞がシベリアの地に眠っていることを思うと、本当に何とも気持ちには表わせないくらい悲痛な気持ちになります。その内にソ連の官憲が人員を確

認して乗船となったのです。

乗船して客室の方へ行かず、ハッチに陣を構えて甲板でナホトカ港の方を眺めていたのです。全く嬉しくて何とも言えないくらい嬉しかった。

船内には日本の看護婦さんも見える。皆さんご苦勞さんの連発である。何と感涙して涙が止まらなくなる。

昭和二十二年十月十五日十三時にナホトカ港を出帆したのです。船はだんだんと港から離れて遠くなっていく。港の方を見たらソ連の人達が皆手を振って別れを告げている。本当に他国の人とは言っても別れ出船の一瞬の愛情が何か心の中に秘めたのである。過去二カ年を思い出してみると、少ない食糧で強制労働で山の伐採、その他の作業をして、苦しみ寒さと栄養失調で体重五十キロになり、十八キロも減ったのである。これが一番身にしてみたのです。食べる物はどんなものでも食べました。一番良い体験をしたと思う。

出帆後二日目に船内で予防注射があり、またD

DDT粉剤で身体を消毒される。乗船して玉葱の汁の香りと米のご飯が一番おいしく、日本へ帰った気持ちになりました。二年振りに日本料理を食べ、感無量の気持ちになりました。日本海の荒波を切って進行する信洋丸の巨体は、日本へと刻々と近づいて行くのが私も栄養失調の身体で骨と皮でも船内で長く座つていられないぐらいで、二時間おきに甲板へ出て動かないと、どうにもならない身体でした。

船酔いもする、かなり揺れるので寝たり起きたりしました。船内では下船の手続きである。五枚ぐらいの用紙を渡されました。だんだんと青々とした陸地が見えました。舞鶴港は本当に綺麗で目が覚めればかりです。

昭和二十二年十月十八日朝に舞鶴港へ入港する。午前九時に湾内に停泊する。舞鶴棧橋の方から米軍の哨戒艇と発動機船が見える。すぐ検疫検査を受ける。その後、下船命令によって発動機船に乗り移り、棧橋に向かう。いよいよ日本の土を踏む

のである。棧橋へ上がり引揚局へ向かう。引揚事務局長と職員の方々から、皆さん、ご苦労さんの一言が何とも言えない有り難い感激の涙が出て感無量でした。

上陸後税関検査を受けて、消毒（DDT粉剤）を頭からかぶり、すぐ入浴になる。ソ連から着てきたものは全部脱いで、二年振りの入浴である。その後新品の服と、ジュバン、コシタを着る。久しぶりでなつかしくなりました。入浴後予防注射をして、青タタミの日本座敷へ案内されて、明るい電灯の下、横になったのです。畳の上で休むのは四年振りです。第二日目は引揚げの手続きと被服の受領とONとOKの調査と税関での日本紙幣の交換覚書を書いたり、残留者と死亡者と行方不明者の調査がある。

第一組は、京都、大阪、和歌山、三重、兵庫方面の人。第二組は九州方面、中国、新潟方面の人。第三組は北海道、東北、関東、中部の人。

私は第三組で出発する。午前十時、車で引揚援

護局より東舞鶴駅へ向かう。この間においしい生柿や饅頭などを買って食べる。四年振りで食べるのでこの味は一生忘れることはできません。また婦人会の方々により、お茶、おにぎり、果物をたくさん頂いてご馳走になる。いよいよ列車がホームに入る。整列して駅員の案内で乗車する。駅ホームには婦人会の方々とその他の人々で御苦労様と万歳で見送って頂く、有り難くて涙が出ました。いよいよ東舞鶴駅を出発、故郷へ帰る第一歩である。

昭和二十二年十月二十一日午後二時、東舞鶴駅を出発する。途中京都駅まで行く間に婦人会と女子学生の方々がお茶やお菓子とおにぎり等を出して頂き、見送って頂きました。列車の中で車掌さんも私達に「長い間シベリアで苦難に耐えて帰還された皆様には本当に御苦労様でした。復員の皆さんには元気で御家庭へ帰還するのであります。私達も嬉しく感謝致しております。私も京都駅までお供させて頂きます」と車内で御挨拶されたの

を聞いて日本の有り難さをつくづく感じました。

いよいよ京都駅へ到着となり、下車して学生の案内でホームで休憩する。夕食をご馳走になり、約一時間後に別の列車に乗車して、二十一時に京都駅を出発、列車は東海道線を夜通し走る。名古屋駅には夜中の十二時である、そのまま通過して浜松、静岡を通過して、富士山を見ながら伊豆、沼津、熱海、国府津、平塚、藤沢、横浜、川崎、品川、東京を通過して上野駅へ十月二十二日、午後一時到着しました。早速下車して東京の学生さんの案内で特別待合室へ行く。学生さんと婦人会の方々に昼食やお茶、果物等を御馳走になる。それから午後七時三十分まで休憩である。この休憩の間に待合室で色々なものを見物したが、一番びっくりしたことは、乞食と浮浪者の多いのに驚きました。上野駅付近を見て一面焼野原になっている。建物はほとんどバラックの建物である。この光景を見て一番驚きました。いかに国内が激戦となったのかとまた被爆を受けた凄まじさに驚きま

した。東京の同胞と別れる。午後七時三十分列車は青森駅へ向かって出発する。一般の乗客もたくさん乗り満員で発車する。宇都宮まで満員である。福島駅から岩沼まで乗客少なくなる。

仙台駅へ到着する、朝である。五分くらい停車して発車する。東北地方の水害の跡を見ながら岩切、松島、小牛田、瀬峰、石越、一ノ関、山ノ目と各駅を通過する。山ノ目駅で一人の婦人が下車する。この人は上野駅から一緒に乗車した人です。途中車内で、ご飯、さつまいも、りんごなどたくさん頂いて御馳走になる。名前も聞かずに大変失礼致したので申し訳なく思っています。一生忘れることは出来ません。私も二時間ぐらいで立ったり座ったりしたのです。栄養失調の身体で尻が痛くなるので我慢して乗っていました。

次に黒沢尻、花巻、盛岡、尻内、野辺地、浅虫と通過して青森駅へは午後六時三十分到着しました。早速学生さんの案内で、待合室へ案内され連絡船を待ちました。この間に、DDT粉剤の消毒

を受ける。夜中零時まで休憩である。夜中に連絡線は出帆する。すぐ船内で休憩して就寝する。

函館港へ朝六時三十分到着する。ここで約一時間待ち合わせ休憩する。駅前を少し見物して朝食をとる。午前七時三十分函館駅を出発する。この列車は旭川駅行きです。五稜郭、大沼、森、国逢、長万部、倶知安、余市、小樽まで通過する。小樽と南小樽でたくさんの方と別れる。札幌、白石、岩見沢、滝川と通過する。

十月二十三日午後十時三十分旭川駅へ到着する。留萌の下山さんと別れる。駅の待合室で一泊する。十月二十四日朝六時網走駅方面へ出発する。稚内方面も同時出発である。浜頓別の戦友と別れる。新聞を買って久し振りに読んでみる。この列車は弟子屈行きです。

色々と乗客の方々とお話をする。津別町へ行かれる土田さんという人と席が一緒で色々とお話を聞いてみる。北海道の今の情勢を聞きました。

土田さんと美幌駅まで一緒に、お話などしなが

ら来ました。美幌駅で土田さんと別れました。

郷土網走駅へ十月二十四日は午後五時四十分到着する。駅を眺めたら、知らない人ばかりでした。常呂駅行きの列車に乗り換えて二見ヶ岡駅へ向かう。

常呂駅行きの列車は出発する。

午後六時三十分二見ヶ岡駅へ到着する。下車したら父が馬車で迎えに来ている。すぐ馬車に乗り、色々と話しながら家路へと馬車は走る。五年振りで帰ったので感激でいっぱいでした。嬉し涙が止まらないぐらいでした。実家の隣の城丸さん、木村さんも一緒に列車から降りて、父と四人で乗って話しながら帰路についたのです。

十月二十四日午後七時三十分我が家へ到着しました。家へ入ったら家に電気がついて明るい我が家になっているのでびっくりしました。母と妹が迎えてくれて御苦労様の連発でした。この一言が嬉しくて涙が出て泣きました。よく帰って来れたことで感激したのです。五年間の過去を振り返つ

て、夢のように思えたのです。一家団欒で夕食をとつたのです。南瓜や野菜等がおいしくて、特に米のご飯と味噌汁の味が本当においしくて、この味は一生死ぬまで忘れられないと思います。これからどんな苦労にも耐え得ることができると体得した次第です。九死に一生を得て無事帰還したのです。

私は臨時召集で月寒防空連隊へ入隊して占守島で軍隊生活をして終戦無条件降伏して、その後ソ連シベリアへ抑留生活をさせられたこの体験は、日本人として初めての終わりであると思う次第です。こんな体験は二度とたくありません。

昭和二十二年十月十九日は応召解除となり、また国鉄に復職したのです。

実家は父母妹三人で農業経営しています。長い間ありがとうございます。

【執筆者の紹介】

現住所 北海道網走市二見ヶ岡

生年月日 大正十年五月二十日父正三郎 母

学歴

シチの長男として生れる

昭和十二年三月 網走市立高等小

学校高等科卒業

昭和二十九年三月 北海道立網走

南ヶ丘高等学校卒業

職歴

昭和十三年三月 国鉄札幌鉄道局

網走駅に就職

軍歴

昭和十八年三月 召集により札幌

市月寒第九五五部隊に入隊

昭和十九年五月 占守島第九十一

師団防空隊に転属

昭和二十年八月 国端岬にソ連軍

上陸し交戦する

昭和二十年八月二十四日 三好野

飛行場で武装解除

昭和二十年十月七日 ポートワニ

港に上陸し第八三六收容所に入る。

以降労働は鉄道線路工事に従事す

る。

昭和二十二年十月十五日 ナホト

カ港出港

昭和二十二年十月十八日 舞鶴港

に上陸

昭和二十二年十月二十四日 自宅

に帰る

昭和二十三年七月 国鉄に復職す

る

昭和二十七年一月 国鉄依願退職

する

昭和二十七年一月 以後、家業の

農業に従事する

昭和二十七年四月 妻スエと結婚

し三人の子供に恵まれた

昭和二十七年から農業経営の傍ら

小学校のPTA会長、網走市農協

監事、老人クラブの会長等の要職

を体験されました。

また、平成十八年度に網走市で

開催された展示会に際しては大変協力して頂き無事終了することができました。

(北海道 森 英一)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義 一

医務室勤務

雪と氷に閉されたシベリア越冬の長いこと。大自然には冬の眠りがあるのに、捕らわれの人間どもにとり、なんと苦渋に充ちた煉獄の日々であったろう。この間何十人の人が春を待たずに、父母妻子の夢にうなされ死んでいったであろうか。四月の声を聞き氷が溶け始め、見渡す氷原のあちこちに流れる水の音が聞かれ、岸辺には名も知らぬ草の緑が濃くなっていく。

春がきて生活に慣れてきてか、病棟の患者も少なくなってきた。そこで患者病棟を閉鎖し、東側奥の空いた兵舎を医務室と名づけ、重症者は病院に入院させ、十五人ほどの患者が入室するようになった。医務室には衛生准尉と曹長の二人、その下に九州出身の橋口衛生上等兵と三人ほどの勤務